

マレーシアにおける日本文化 ——日本語教育から文学翻訳まで——

葉 蕙¹⁾

要 旨

マレーシアでは、1981年に日本・韓国の経済発展や労働論理などに学ぼうとする「東方政策」(Look East Policy)がマハティール元首相の主導下で発表された。この政策の具体的な事業計画の一つに、日本の大学教育を受けることが掲げられており、高等学校卒業試験で優秀な成績を修めた学生は日本の大学または高等専門学校へ留学することができるとされた。これに伴い渡日前の日本語教育が始まった。この政策は、今日のマレーシアの日本語教育に大きな影響を与えている。

国策として推進されている「東方政策」の影響で、マレーシアの人々、特に若者達は日本に対する経済面での関心の他、マンガやアニメ・ゲーム・映画・音楽・和食などといった日本発の文化コンテンツにも好意を抱いている。その中でも日本のアニメやマンガが異常な熱意で受け入れられている。マンガからの影響によって、日本文化に関心を寄せ、日本語学習を始めた人は少なくない。

この状況によって、日本文化はマレーシアの若者層に浸透し、「日本」という国が憧れの対象となり、日本語学習や留学の動機となっている。本稿はマレーシアの教育機関による日本語教育の全体像を概観し、言語教育と日本文化の受容とのつながりを明らかにする一方、異文化コミュニケーションの最前線ともいえる「翻訳」を手がかりに、マレーシアにおける日本文学翻訳事情を考察する。

Keywords : 東方政策, 日本語教育, 日本文化, 翻訳

はじめに

マレーシアは、マレー半島(西マレーシア)とボルネオ島の北部(東マレーシア)から形成される。首都はクアラルンプール、国語はマレー語(Bahasa Malaysia)である。国土面積は約330,000km²、総人口は2,773万²⁾であり、世界で43番目である。マレー系は64%、中国系は25%、インド系は7.5%およびその他の先住民族(カダサン族・イバン族・ネグリト族・セノイ族など)3.5%から構成される多言語・多民族国家である。

1981年、マハティール元首相は就任直後に「東方政策」を唱えた。それは、日本及び韓国を模範として、産業技術研修員、大学・高専留学生を派遣し、日韓両国の技術や労働論理、経営哲学を学び、マレーシア人の労働論理の変革を図り、マレーシアの経済発展に役立てることを

目的としていた。

また、マレーシアは2020年までに先進国への仲間入りを果たすことを目指して、「ビジョン2020」(Wawasan2020)を掲げている。この理念に基づいて、1996年に壮大な「マルチメディア・スーパー・コリドー」(MSC)³⁾構想が掲げられた。その一環である電子図書館構築は国家情報化戦略上重要なものと位置づけられている。これは国内にある1万館以上の図書館を結ぶ大規模な国家電子図書館を構築する計画であり、現在はパイロット・プロジェクト「Mylib」⁴⁾が運営している。しかし、開発途上国であるマレーシアは、図書館情報学教育機関をほとんど持たず、現在は電子図書館の養成を全面的に日本に依存している状態にある。そのため1996年から、国際交流基金が毎年「日本研究研修プログラム」を実施し、マレーシアの大学・研究機関の図書館において日本関係図書コレクションを扱う専門司書を日本に招聘し研修が行われている。これはマレーシアにおける日本研究および日本情報の提供の基盤整備となっている。

1982年に開始された「東方政策」の一環として、2007年までの25年間に、11,467名の国費マレーシア人留学生や研修生が日本での研修・留学を実現してきた⁵⁾。これらの研修・留学経験者は帰国した後、マレーシアの1,440社⁶⁾あまりの日系企業や政府の教育機関で活躍しており、マレーシアの経済発展に大いに貢献した。

また、両国間の友好親善を目的に、日本の帝京大学グループがクアラルンプール日本人会の協力を得て、1997年に「帝京マレーシア日本語学校」を設立した。コースは1月入学と5月入学があり、前者は15ヵ月、後者は18ヵ月間マレーシアで予備教育を受けた後、日本の大学へ留学することになっている。留学生は国費と私費両方籍している⁷⁾。

一方、研究開発・商品設計・生産管理などを担うエンジニアの育成に加え、企業のマネジメントに携わる能力を持つ人材を育成するため、2001年にマハティール元首相は「マレーシア日本国際工科大学」(MJIUT)の設立構想を提案した。これはASEAN諸国の人材養成の拠点となることを目指して、日本の価値観・労働論理を文化環境の中で教育するという構想である。2005年12月から準備作業を行い、マレーシア日本国際工科大学準備センター(MJUC)を開設、開校の準備が進められている⁸⁾。さらに、PKO・海上安全・テロ対策の面においても、両国間の協力関係が強化されている。

なお、毎年マレーシアにおいて実施されている「ジャパン・フェスティバル」では日本のマンガや映画・音楽などの日本文化紹介に加えて、草の根のレベルでの文化交流が活発に行われている。たとえば現地日本人会などが中心となって開催される盆踊り大会には、マレーシア在留日本人と現地民を合わせて、数万人が参加する大盛況となっている。36年間にわたって開催するチャリティバザーも伝統行事となって継続されており、二国間の文化・社会的関係は一層緊密になっている。

1. 日本語教育事情

マレーシアにおける日本語教育の流れは第二次世界大戦中の日本軍政下の言語政策から始まった。

1. 1 日本語教育の歴史

マレーシアにおける日本語教育の歴史は三つの時期に分けられる。

①太平洋戦争の時期

1941年12月8日、真珠湾攻撃とほぼ同時に日本軍はマレー半島のコタバルに上陸した。その後イギリス軍と戦いながらマレー半島を南下して、シンガポールを攻撃した。1942年2月15日に、日本軍はシンガポールの占領を果たした。英植民地であったシンガポールは日本に「昭南島」と名づけられた。

太平洋戦争が勃発する直前、日本軍占領地域において、いわゆる「ペン部隊」の派遣や宣伝班・報道班の徴用があり、多くの文学者が戦地へ赴いた。マラヤ・シンガポール方面にも石川達三・清水幾太郎・中島健三・井伏鱒二らが向かった⁹⁾。井伏鱒二は当時陸軍宣伝班員としてシンガポールの「昭南タイムズ」社に派遣された。井伏は「昭南タイムズ」時代のことを題材に、『花の街』（後『花の町』と改題）という小説を戦時下に発表している¹⁰⁾。そして宣伝班員としての井伏は、「昭南タイムズ」の社長を務める一方で、「昭南日本学園」で現地の教員相手に日本語や日本歴史を講じてもいた¹¹⁾。

日本占領期のシンガポール・マラヤに日本語教育が実施された時期、現地の青年・成人に日本語を教授する語学校として、「昭南日本学園」が設立された¹²⁾。学長には宣伝班員として昭南入りした詩人・神保光太郎が就任した。神保の記述によると、「もともと、教育のことは、軍政部または市役所の仕事」であったが、「日本語普及運動の実行案の一つ」として宣伝班の所轄のもと開校された¹³⁾。

当時の日本語教育は強制的に行われていた。前田貞昭は、日本軍支配下の「日本語」＝「日本精神」というイデオロギーに支えられた日本語普及及び工作は、「露骨に強権的なものであった」と批判した¹⁴⁾。また、牲川波都季は、戦時中「日本語」による「日本精神」の注入を目的とした日本語教育は明らかに（マラヤの）多民族を日本人化しようとする同化の一手段であり¹⁵⁾、問題ある行為であったと指摘した。

一方、太平洋戦争の後半、日本政府は「南方特別留学生」という形で、ビルマやジャワ・マラヤなどの占領地域の住民を日本に留学させた。1943年6月と1944年6月の二回にわたって、マラヤから12名の特留生が日本に赴き、広島大学をはじめ、様々な日本の町で勉強した。その中の2名が原爆の犠牲者となった¹⁶⁾。この時代は元マラヤ大学学長ウルク・アジズや日本語教育のパイオニア、アブドゥル・ラザクといった、後に親日家として活躍する若者が育った時代でもあった。

②戦後から80年代にかけて

終戦後イギリスは日本敗戦を機に、再びマラヤに侵入し、植民地支配した。その時期は日本軍統治の反動で、国語となったマレー語が重視され、各学校および政府機関で使用することが義務づけられ、日本語教育は姿を消した。いわゆる「日本語教育空白の時代」である¹⁷⁾。当時は英語も軽蔑されていた。

マレーシアが1957年8月31日に新生国家として独立した直後、日本は真先にマレーシアを

承認し、外交関係が樹立された。1960年代後半から80年代初めにかけて、日本の経済は高度成長期に入り、日系企業の東南アジアへの進出も大幅に増えてきた。日系企業に勤める人たちの間では、出世のため、日本語の学習熱が高まっていた。日本語教育機関も次々と開設された。たとえば1966年にマラヤ大学、1969年にマラ工学専門学校（現マラ工科大学）、1970年にマレーシア科学大学、1975年にマレーシア国民大学にランゲージ・センターが続々と発足した。民間機関ではマレーシア日本語協会（JLSM、クアラルンプール校）が1968年に、マレーシア・キリスト教青年協会YMCAが1974年に日本語講座を開講し、一般人を対象に日本語クラスが始まった。

③東方政策以降

1982年に推進された「東方政策」は日本語教育に大いに影響を与えた。日本の大学や高等専門学校への留学、産業技術研修生派遣などが行われている。1982年には、マラヤ大学に日本留学予備教育課程が設けられ、日本留学のための準備が行われた。2009年5月現在、ほとんどの教育機関で大学留学前予備教育が行なわれている¹⁸⁾。また、1984年にレシデンシャル・スクールで日本語教育が開始された。（レシデンシャル・スクール Residential School, 以下RSと略称。ブミプトラの優秀な生徒を集めたエリート養成中等教育機関である全寮制学校がマレーシア全土にあり、2009年5月現在ではRSが46校ある。）2005年には国立の一般中等教育機関・デイ・スクール（以下DSと略称）では第2もしくは第3外国語としてアラビア語・ドイツ語・フランス語・中国語・日本語から自由に選択できるようになった。DSは2009年現在では30校ある。現在46校のRSと30校のDSで、日本語が選択科目として教えられている。

現在マレーシア国内の日本語教育機関は、中等教育機関であるRSとDSの他、高等教育機関である大学と予備教育課程、そして学校教育以外の国際交流基金クアラルンプール（JFKL）日本語センターや民間の日本語学校がある。下記の表は2006年度に国際交流基金によって実施された調査の結果である。この表からマレーシアにおける日本語教育全体の発展プロセスが見てとれる。

表：

マレーシアにおける日本語教育機関数・教師数・学習者数¹⁹⁾

	初等・中等教育		高等教育		学校教育以外		総計	
	1998年	2006年	1998年	2006年	1998年	2006年	1998年	2006年
機関数	30	64	16	27	68	51	114	142
教師数	56	78	87	138	176	221	319	437
学習者数	2,564	8,984	2,892	7,804	3,763	6,132	9,219	22,920

* 国際交流基金：『海外の日本語教育の現状＝日本語教育機関調査・1998年・2006年』より

調査によれば、マレーシアの日本語学習者数は日本語教育が実施されている133カ国のうち12番目に位置する22,920名である。総計機関数は142、教師数は437名になり、マレーシアの総人口2,773万人の中で、およそ1,400人に一人となる比率から見ると、日本語学習熱がかなり高いと断言できる。

この調査からみれば、マレーシアでは全教育段階で学習者が増加していることがわかった。また、日本語学習者の学習目的を見ると、「日本の文化に関する知識を得るため」、「日本語によるコミュニケーションができるようになりたい」、「日本語という言語への関心」、「日本に留学するため」、「将来就職のため」、あるいは「今の仕事で日本語を必要とするため」など現実的なニーズが特徴であることが上述の調査によってわかった。

1. 2 日本語教員養成プログラム

これまで、マレーシア教育省は中等教育段階での日本語教員を養成するにあたり、他科目の教員を日本に留学させ学位をとらせる方法でコンバートあるいは「転向」することを行った。しかし、2005年度から従来の全寮制の中等学校に加えて、普通学校でも日本語教育が行われるようになったため、さらなる教員の養成が急務となった。そこで初めて、マレーシア国内での日本語教師養成が開始された。それが「国際言語教員養成所」(*Institut Perguruan Bahasa-bahasa Antarabangsa*=マレー語略称 IPBA)である。

システムは次の通りである。マレーシア教育省が中学校や大学の学校長を通じて、日本語教員への転向を希望する教員を募集する。候補者は日本語集中研修12週コースを経て、修了試験にて15名に絞られる。通過者は日本語および教授法の研修一年コースに進む。この修了試験に合格したものは、インターンの準備として一年間の日本語教育を受ける。翌年5月～7月の訪日研修に参加してプログラムは終了する。

それまでは、1990年から8年間にわたり、初等・中等教員を日本の大学に送って学位を取得させる「日本語教師養成プログラム」(JLPMT)がマレーシア教育省の公共サービス局 (*Jabatan Perkhidmatan Awam = JPA*)により実施されていたが、1998年に一時中断された。2003年より再開されたが、このIPBAにおける日本語教員養成プログラムが設立されたことによって、JLPMTは2008年に終了した。

2. マレーシアにおける文化・文学翻訳事情

翻訳とは文化である。文化を「社会の構成員としての人間が獲得した知識、信仰、芸術、道徳、法律、習慣その他、あらゆる能力や習慣を含む複合的総体である」²⁰⁾と定義すれば、文化は行動様式あるいは生活様式全体として捉えることができる。

ここでは翻訳と文化とのかかわりとして日本マンガと日本文学の翻訳出版を例に取り上げて考察する。

2. 1 サブカルチャーとしての日本マンガ

「東方政策」がきっかけで、マレーシアの人々、特に若者たちが日本のサブカルチャーに関心をもち始めた。80年代初期、日本からゲーム・アニメ・マンガ・ドラマ・音楽などといった文化コンテンツが次々とマレーシアに輸入され、いわゆる「哈日」(「ハロー日本」の略)ブームが巻き起こった。特に日本マンガは人気を博し、その影響によって日本の文化に関心を寄せ、日本語学習を始めた人は少なくない。

マンガは世界の日本文化の発信に大いに貢献しているという。そしてマンガは日本語学習の強力なツールになる²¹⁾。実際に、マンガやアニメのおかげで日本を発見し、日本に魅せられている人は数えきれないほどいる。

もちろん、マレーシアにも大勢のアニメ・マンガのファンがいて、漫画家志向の若者も年ごとに増えている。『ドラえもん』『ドラゴンボール』『名探偵コナン』『クレヨンしんちゃん』などはそれぞれの民族にも読めるように、マレー語・英語・中国語に翻訳されている。テレビ放送でもマレー語を中心に放送されている。ただし、マレーシアはイスラム国家なので、社会道徳の基準が厳しく、暴力やセックス場面が「児童不宜」（子供によくない）という理由で、検閲に許可されず、作品が放送禁止となることがしばしばある。

日本の大手出版社である小学館と集英社のマンガ翻訳権の代理業務を行なっている「鹿島国際著作権事務所」(The Kashima Agency)²²⁾の代表取締役・鹿島明氏によれば、正式に契約し、マンガのマレー語版・中国語版を刊行しているマレーシアの出版社は下記の通りである。

- ①小学館：Tora Aman, Art Square Group, PCM (Pacific Center Management), 創芸マレーシア (Chuang Yi Malaysia, シンガポールの出版社の支社) の4社。
- ②集英社：Comics House。現在一社のみ。Comics House は日本の双葉社の「クレヨンしんちゃん」なども契約し刊行している。

また、Tora Aman と創芸マレーシアは、講談社のコミックスも契約し、刊行している。一方、「アニメ・マンガ」の上映や翻訳には著作権に関する問題点もある。鹿島氏によれば、小学館と集英社の漫画をマレーシアで刊行している出版社は、上記以外はすべて海賊版出版社だという。海賊版マンガになると、日本マンガが圧倒的に多いというのが現状である。『ドラゴンボール』を始め、『ドラえもん』『SLAM DUNK』『クレヨンしんちゃん』『NARUTO』、『ONE PIECE』、『BLEACH』などのような人気マンガが多種多様な形で印刷出版されている。

2. 2 マレーシアの文学翻訳事情

海外での日本文学翻訳事情は国によって異なる。アメリカやヨーロッパ諸国ないしアジアの中国大陸や台湾では、日本文学の翻訳は盛んであり、翻訳された作品の量も多く質も高く、翻訳者の数も多くて専門化している。翻訳書の数は、国と国の関係を示すバロメータの一つになる²³⁾。その国の翻訳書がどれほどあるかで、両国間の相互交流や相互理解の深さが分かるであろう。マレーシアにおける翻訳となると、日本マンガの翻訳はともかく、日本文学の翻訳出版は発達したものではない。

筆者の知る限り、現時点マレーシアで日本文学の翻訳に従事している人は二人しかいない²⁴⁾。その一人はタイバ・スライマン氏である。タイバ氏はマラヤ大学の中国学科を卒業した後、日本に二度留学した。早稲田大学と筑波大学の2つの修士号学位を取得した後、マレーシアに戻り、国民大学(UKM)で日本語講師として勤めるかたわら、日本語小説の翻訳も手掛けていた。

タイバ氏がマレー語に翻訳した日本文学作品は、有吉佐和子『華岡青洲の妻』(1992)、『桃太郎』(改編・1995)、夏目漱石『こころ』(1996)、有吉佐和子『恍惚の人』(1998)、『日本民間童話集』

(改編・2002)の5冊である(年号は出版年)。また、マレー文学を日本語に翻訳した作品は『レダン山のお姫様』(2003)と『山の麓の老人』(2005)の2冊である。そして日本語教育関連の教材も編集出版しており、< *Berurusniaga di Jepun* > (『日本人と働く法』・1988)、< *Mari Belajar Bahasa Jepun* > (『日本語を勉強しよう』・1996)、< *Nahu Bahasa Jepun* > (『基礎日本語文法の手引き』・上洋子合編・1997)と題された3冊がある。翻訳人材の少ないマレーシアの出版市場のなかでは、タイバ氏の存在は貴重であると言えよう。

2. 3 翻訳の課題

一方、「マレーシア国立翻訳協会」²⁵⁾ (*Persatuan Penterjemahan Malaysia* = PPM) は1979年10月に結成された。それは国立言語図書研究所 (*Dewan Bahasa dan Pustaka*=DBP)²⁶⁾ が民族間における文学の相互交流を活動方針の中心として創設した翻訳と創作の組織であり、もともとは非営利機関であった。協会の最高経営責任者のモハメド・カイル・ナディロン氏は2008年6月15日に、マレー文学100作品を、英語・ポルトガル語・フランス語・中国語・アラビア語・ドイツ語・日本語・ハンゲルの8カ国語に翻訳し世界に紹介して行く計画を発表した。当協会には既に30作品の翻訳に着手しており、残り70作品については今後2年間で作業を完了し、2010年までに15万冊を発行することを目標としている²⁷⁾。

しかし、他の文学翻訳と比べれば、マレーシアにおける日本文学翻訳はほとんど発達していない。その原因は以下の通りと考えられる。

1) 出版市場が分散している

マレーシアでは英語が普及しており、あらゆる民族の知識人は英語で日本関係の情報を得ることができる。多言語社会が原因で、出版市場が分散しているのである。中国語話者層であれば、中国語メディアで情報を入手している者もいるであろう。つまり、マレー語で出版することのメリットがほとんど見られない。利益が出ないものに対し出版社が、わざわざ著作権を買って、翻訳者に頼んで出版を行うことはないであろう。

2) 教育政策との関係

マレーシア政府の教育政策においては、「理系を重んじて文系を軽んじる」という考えが根付いているため、文学はあまり重視されていない。実際のところ、学校教育機関で日本語を学ぶ者は、文系より理系を専攻する人数が圧倒的に多い。例をあげれば、マラヤ大学における日本予備教育留学課程(AAJ)では、全員が理系専攻であり、文系専攻の学生は一人もいない。国家の意図で発足した「東方政策」が日本との関わりを強めてきたとはいえ、毎年数百人も来日するマレーシア留学生の中で、日本文学を専攻しようとする人がほとんどいないことは事実である。筆者の調査によれば、今まで来日した国費留学生の中で、日本文学を専攻する学生は一人しかいない。それは広島大学で日本近代文学を専攻した梁月梅氏²⁸⁾である。マレーシア人として日本文学博士号を取得したのは、おそらく梁氏が初めてであろう。

3) 言語学習と翻訳が結びつかない

日本語学習者は翻訳というものをあまり重要に考えていないため、翻訳者を目指す人も少なく、その育成も盛んではない。

4) 外国からの直接輸入

マレーシア人は海外の書籍、特に文学書に関しては直接輸入して読む傾向がある。マレーシアの中国語話者層は台湾や香港（繁体字版）と中国（簡体字版）から輸入した日本文学の翻訳書を買求めるし、英語話者層はアメリカやイギリスから輸入された英語版を簡単に手に入れられる。外国で既に翻訳された作品は容易に手に入れられるため、自国の出版社に依頼して文学作品を翻訳することより経済的である²⁹⁾。

以上の理由により、翻訳業に携わる人も少なく、翻訳家の育成もされていない状態で、翻訳出版業が低迷しているのは当たり前だと言えよう。

2. 4 村上春樹文学現象

村上作品がマレーシアに紹介される前は、マレーシア人は日本文学にほとんど関心を持たなかった。マレーシア人の日本現代文学に対する新たな認識は、村上春樹文学から始まったと言えよう。

周知の通り、1987年刊行の村上春樹『ノルウェイの森』は日本で数百万部もの売り上げを見せた。これがきっかけで、村上は日本内外の広い領域で人気作家となり、一気に「村上春樹現象」が巻き起こった。今までに36カ国以上の言語に翻訳され、40を超す国や地域にわたり読まれている。「村上春樹現象」はマレーシアでも巻き起こった。特にマレーシアの中国語圏では人気を博した。マレーシアの読者は輸入した中国語版や英語版の村上作品を読んでいる。

2006年3月25日から26日にかけて、国際交流基金主催の国際シンポジウム「世界は村上春樹をどう読むか」が東京大学・駒場キャンパスで行われた。世界17カ国から計23名の村上作品の翻訳者や評論家が集まり、各国や地域での村上文学の読まれ方、翻訳するときの苦労話などを中心として語り合われた³⁰⁾。筆者も村上翻訳者として招聘され参加した。その時に「翻訳」というプロセスを通じた文学作品の読まれ方の多様性を発見した。これを機として、日本文学への更なる探究心が芽生え、再び大学に入学することを決心した。去年筆者は中国語メディアを中心にマレーシアにおける村上文学の受容を考察したが³¹⁾、今後はエスニック集団を対象に研究したいと考えている。

アメリカの日本研究者兼翻訳者ドナルド・キーン博士は、「翻訳の土壌がある文化と、そうでない文化がある」³²⁾とかつて指摘したことがあるが、おそらくマレーシアには翻訳という文化の土壌はないであろう。日本文学の社会的価値が無視されている現象は、日マの文化交流の促進とともに検討すべきだと思われる。

おわりに

本稿では、マレーシア政府が推進している「東方政策」の下での日本語教育の現状を概観してきた。その上で、日本マンガの出版事情や日本文学の翻訳事情について考察した。マレーシア政府は2020年までに先進国入りを目指して、マルチメディア・スーパー・コリドー（MSC）構想や「ビジョン2020」などの政策を打ち出している。その一環として外国語教育を充実化し、高等教育改革が行われている。

マレー語で「言語は民族の魂だ」(Bahasa Jiwa Bangsa) という諺がある。言語は民族の「心」あるいは魂・精神の状態を反映している。激しい国際競争に向かって、マレーシアは日本語教育を通して、日本の科学技術・労働論理・経営哲学を学び、多様な人材育成に力を入れて高度知識社会を築きあげようとしている。

ただ、文化・文学翻訳の観点から見たら、日マ関係は依然として希薄だと思われる。確かに、過去 27 年間の「東方政策」は多くの人材を育んできたが、それは主に理工系方面の人材であり、人文系の人材はいまだ少ない。特に翻訳に携わる人材は不足している。たとえば IPBA 日本語教師養成プログラムによる言語教師の訓練は望ましいことだが、これにより輩出されるのが毎年たったの 15 名というのは明らかに少なすぎる。今後、より多様な民族とより多くの人がこのプログラムを受けることができるようになることを願っている。

もし政府が出版の条例をゆるめ、学校教育機関などで言語学習プログラムを増やしたら、翻訳に携わる人材を育むことができ、マレーシアにおける日本文学の宣伝にも有利になるであろう。ただし、翻訳は語学力や訳している分野の専門知識に大いに影響される仕事である。目標言語のみならず、起点言語の言語能力や表現力も身につけなければならないため、これらの語学力を身につけられるような環境を用意しなければならない。また、高い報酬などのインセンティブを用いて、日本文学を専攻している人々が翻訳に興味を持つように鼓吹することも重要である。

もちろん、文化・文学翻訳は言葉の置き換え作業だけではなく、現地の読書環境、出版市場、社会および政治・経済的要素も考えなければならない。

かつて遠い存在であった日本。しかし今、マレーシアと日本は親しい仲になりつつある。21 世紀の今日、「異文化コミュニケーション」という話題が盛んに取り上げられている。日マ両国間には経済的・物質的な関係だけではなく、学術的・文化的な関係においても一層の深化を期待したい。

* 本研究の「日本語教育」に関する部分は、日本国際交流基金クアラルンプール日本文化センター提供の資料に基づいてまとめた。

注

- 1) マレーシア出身の日本現代文学翻訳家。
- 2) マレーシア統計局 Department of Statistics ホームページ < <http://www.statistics.gov.my/> > 2008 年センサスによる
- 3) MSC (Multimedia Super Corridor) とは、KLCC と呼ばれるクアラルンプール市の中心地から南の新国際空港まで南北 50km 東西 15km の区域に 2.5 から 10GB の高速通信インフラを整備したうえ、サイバernetics を整備することにより、マルチメディアの可能性を引き出すためのハード・ソフト両面の条件を備えた実験場を世界の企業に提供しようという構想である。電脳都市・サイバernetics (Cyberjaya) と電子行政都市・プトラジャヤ (Putrajaya) を配置する。
- 4) National Library of Malaysia ホームページ < <http://www.mylib.com> > を参照。
- 5) マレーシア外務省のデータによる。このデータには私費留学生が含まれていない。 < <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/index.html> > を参照。

- 6) 出典: JETRO クアラルンプール。マレーシア日本商工会議所 = JACTIM 『地域別・業種別日系企業数』より。 < <http://www.jactim.org.my/useful/img/japanese2008.pdf> >を参照。
- 7) 炭谷憲一（帝京マレーシア日本語学院校長）が筆者に対して行った2009年1月16日のインタビューによる。
- 8) 「日刊ブリタ」2007年8月22日に掲載。ホームページ < <http://www.nikkanberita.com> >を参照。
- 9) 黒古一夫『戦争は文学にどう描かれていたか』八潮社 2005年 63頁
- 10) 『花の街』は昭和17年8月17日から10月7日まで、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』の両紙に連載された。この小説は井伏鱒二が「昭南タイムズ」に勤めた時のことを題材としている。小説の中では、すでに戦闘が終わったシンガポールでの生活を描いたが、戦争に伴うことは一切言及しなかった。
- 11) 井伏鱒二著『徴用中の見聞—昭南島宿舎にて』（『井伏鱒二自選全集』第8巻・収録）新潮社 1986年
- 12) 明石陽至「日本軍下のマラヤ・シンガポールにおける文教政策——1941-1945」倉沢愛子編『東南アジア史の中の日本占領』早稲田大学出版局 1997年 293-329頁
- 13) 神保光太郎著『昭南日本学園』愛之事業社 1943年
- 14) 前田貞昭『井伏鱒二の占領体験—異民族支配と文学（シンガポールの場合）—』岐阜大学国語国文学 Vol.18, 1987年, 43頁
- 15) 牲川波都季『日本人の考え方を理解するということ—90年代以降の日本語教育実践から—』早稲田大学日本語研究教育センター紀要 Vol.18, 2005年 67-90頁
- 16) 二人の原爆犠牲者はサイド・オマールとニック・ユソフ。彼らは1943年第一期生として来日し、広島で被爆死。前者は京都の円光寺、後者は広島市光善寺に墓がある。
- 17) マラヤ大学・日本留学予備教育課程 AAJ の日本人教師団団長・渡辺淳一氏は日本語教育の歴史の三つの時代について、その特徴から、第一の時代を「押し付けの日本語教育の時代」、第二の時代を「日本語教育空白の時代」、第三の時代を「日本語復興の時代」と名づける。
- 18) 2009年現在マレーシアにある大学は20校（国立12校、私立4校、国際大4校）である。ほとんどの大学（15校）で日本語教育を実施している。私立の華人系大学（ラーマン大学 = UTAR）やカレッジなどでも日本語クラスを開講している。
- 19) この2006年度の機関調査の結果や過去の機関調査の概要は国際交流基金の本部ウェブサイトでご覧いただける。 < <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html> >を参照。
- 20) 有名な人類学者 E. B. タイラーがその『原始社会』（1871年）のなかで使った定義。
- 21) 『マンガから Manga へ』『をちこち』No.19, 国際交流基金発行 42-45頁。スペイン出身の翻訳家マルク・ベルナベがマンガによる日本語教育開発の専門家として『マンガで日本語』シリーズを執筆している。
- 22) 主に日本製の漫画の作品および著作権を海外の出版社に紹介し、日本文化を「輸出」する役割をしている。
- 23) 伴美喜子『マレーシア凜凜』めこん出版 2002年 255頁。
- 24) タイバ・スライマン (Thaiyibah Sulaiman) 氏と葉蕙の二人。葉蕙の翻訳作品は香港において翻訳出版され、マレーシア現地では出版されていないが、輸入書として読まれている。
- 25) マレーシア国立翻訳協会ホームページ < <http://www.ppm-mta.org> >を参照。
- 26) Dewan Bahasa dan Pustaka (DBP) ホームページ < <http://prpm.dbp.gov.my/> >を参照。
- 27) < *New Straits Times* > 2008年6月15日の記事による。 <http://www.nst.com.my/> を参照。
- 28) 梁氏はマラヤ大学で東アジア研究学科を専攻し、在学中一度交換留学生として広島大学に留学した。2002年10月に文部科学省奨学生として再来日し、広島大学で日本近代文学を専攻した。同大学で修士及び博士課程を修了して2008年9月に文学博士号を取得した。

マレーシアにおける日本文化（葉）

- 29) ただし、これは英語や中国語の著書や翻訳書にかぎり、日本語の作品があまり訳されていない問題は依然として解決していない。
- 30) 『世界は村上春樹をどう読むか』シンポジウムの全記録は本として刊行された。『A Wild Haruki Chase - 世界は村上春樹をどう読むか』柴田元幸他編 文芸春秋社 2006年
- 31) 葉蕙「マレーシアにおける村上文学の受容——中国語メディアを中心とする考察」（『東アジアが読む村上春樹』論文集に収録）若草書房 2009年6月 239-269頁
- 32) 芳賀徹編『翻訳と日本文化』『日本という翻訳の宇宙——文化を映す翻訳・翻訳が映す文化』の座談会で、中西進、小田島雄志らと「翻訳する文化と翻訳しない文化」について論じている。文化国際交流基金協会 2004年 152-192頁